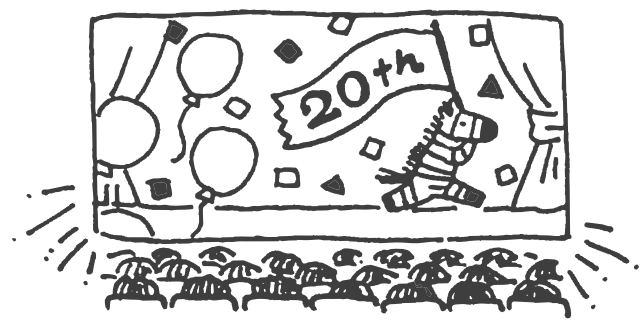


映画、あらたな はじまりの時。



20年前、6作品の上映で産声を上げた当映画祭は、「しんゆり」の街の変貌とともに同じ時を刻んできました。それは映画祭を通じた街づくりの歩みでもありました。

観客と制作者が語り合える場を、街にアートな装飾を、身体の不自由な人にも観る機会を、中学生に映画体験を、校庭で野外上映を…。市民ボランティアと映画人、学生が時に笑い、時に泣きな

がら想いを形にし、ゲストや地域の皆さまの笑顔に支えられてこの節目の年を迎えることができました。

故・今村昌平監督とともに映画祭を通じた「しんゆり」の街づくりのビジョンを描き続けてきた武重邦夫初代実行委員長、第1回上映作品選定に関わった山田太一さんに、映画祭の魅力を改めてうかがいました。

「しんゆり映画祭」の魅力と魔力



2009年、第15回映画祭で行われたシンポジウムにて

武重 邦夫

(映画監督・映画プロデューサー)

震災から一年後の福島の前ヶ丘を舞台に、ピアノに魅せられた少女の物語「物置のピアノ」(企画・製作:武重邦夫、監督:似内千晶)が上映中。東京、神奈川はじめ、10月18日からは愛知・名演小劇場で上映予定。

1995年4月、川崎市市民局文化室から「芸術と文化の街づくりイベント」の一環として映画祭を開きたい。是非、協力して欲しいと日本映画学校に依頼が在りました。1月に阪神淡路大震災が在り、3月の地下鉄サリン事件で日本中が揺れていた年のことです。

あの頃の新百合ヶ丘には映画館も無く、大きい建物と云えば、麻生区役所と新百合21ホールと映画学校くらいでした。2年後、ビブレやOPAやエルミロードが出来て街は一変するのですが、当時は夜になるとタヌキの親子が出没する荒れ野原でした。映画館も無い町で映画祭を開催?何が「芸術と文化の街づくり」なんだ…深夜、人気のない駅の通路にポスターを貼りながらボヤいたのを覚えています。

10月27日13時。「第1回しんゆり映画祭」は淀川長治氏の基調講演で産声を上げました。会場は新百合21ホール。3日間で6作品上映と3講演のプログラムです。ゲストには淀川長治氏、新藤兼人氏、山田太一氏、今村昌平氏、市原悦子さんをお迎えしました。この田舎町に本物のアーティストを登場させたいと、私なりに考えての事でした。やがて新百合ヶ丘にも若いクリエイターや芸術家が育ち、彼らの多彩な活動により、魅力的な本当の文化の街が出現するだろう…。そんな願いを込めた企画でした。

映画祭は「まつり」だから、近隣住民が中心になって盛り上がるのが本筋です。

そう気づき、2年目からは市民映画祭に路線変更するべく市民ボランティ

アを募集しスタッフ養成講座を開設しました。第1期生は主婦やOL・デザイナー・学生の混成チームでしたが、故・野々川千恵子さんを筆頭に皆、自分たちの住む新百合の街を魅力的にしたいと願っている人たちでした。好奇心が強く、サービス精神が旺盛で、創意工夫を楽しむ人達の出現…この自由な市民精神との出会いこそが、市民主導型の新たな映画祭の誕生を実現したのです。

あれから20年。複雑多岐で手間のかかる「しんゆり映画祭」が、今なお生き続け成長しているのは驚きと言うしかありません。支えているのは無給のボランティアスタッフたちです。

彼らはほぼ一年中企画し、会議し動き回っている。会期が近付けば会社を休んだり睡眠時間を削ったりと苦勞の連続です。

それでも皆で続けてきたのは、多分、「しんゆり映画祭」が名画を見せるだけではなく、見せるための創作作業だからだと思います。そう、人間にとってクリエイの楽しさや歓びは何物にも代えがたいものです。長い人生の或る瞬間、ステージに上がり眩しいライムライトを浴びる快感…私には、「しんゆり映画祭」がそんな素敵な体験が出来る魔界に思えて仕方ありません。

映画祭がはじまった1995年の新百合ヶ丘駅前

